衆院選 悩むあなた

気負わず出かけよう

ことし21歳で芥川賞をとった宇佐見りんさんは、全身全霊でアイドルを「推す」女子高校生を描いて話題になった。それほど応援できる候補者がいたら、きょうの投票日も意気揚々と迎えることができるだろうが、現実はそうもいかない。

帯に短しタスキに長し。いいこと言ってるみたいだけど、さて信用していいのか。1票投じたところで世の中が変わるわけじゃない。とはいえ棄権では、ただの「お任せ」になってしまう――。選ぶという作業は、ときに思いのほか難しい。

花園大学の師茂樹教授は1年生の授業で、この総選挙で投票に行くかを165人に尋ねた。66人が行かないと答えた。理由を聞くと、「なんとなく投票するのは無責任」「よくわかっていない自分が参加するのはよくない」などの答えがあった。

「どこかに『正解』があると思ってしまっているようだ」と師さんはいう。

いまの若者のきまじめさがうかがえる話だが、上の世代でも同じような思いを抱く人はいるだろう。だが、そこまで考えこむことはないのではないか。

この社会には山のように課題がある。日々の生活を切り盛りしながら、そのすべてを十分に理解したうえで「正しく」投票することなど、そもそもできるわけがない。

唯一の解決策などないし、完全に考えが一致する候補者や政党が存在するはずもない。選挙のあとで、自分の選択を悔やんだ経験をもつ人も少なくないだろう。それでも、みんなが不完全な1票を投じあうことでこの社会は成り立っている。

選挙は民主主義に息を吹きこむお祭りとみることもできる。熟練の舞を奉納する人がいてもいいし、屋台のフランクフルトを食べに来る人がいてもいい。大勢の人がそれぞれの形で参加することで、共同体の足腰を強くすることができる。

作家の幸田文は、投票所で立会人を務めて人々を観察した際の経験を書き残している。

「心がまっすぐにきまって揺ぎない人、一応はきめて来たが人に誘われたら崩れそうであやしげな人、夫婦づれでよく相談した上で出て来たなと思える人、意見は違うけれど友だち同士の仲のよさは別だ、といった感じの人、忙しいなかをちょっと投票に来て大急ぎに帰る人、そのためにゆっくり来てゆっくり帰る人、帰りには買物をする気の人、さまざまなことが自然に推察された」「こういうのは意外なほどよくわかる」

1950年代後半のことらしい。時が移っても各投票所でこんな光景がみられるだろう。気負うことなく出かければいい。

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.